

THE
HOSHINA
ACADEMY
Chamber Orchestra
“Ensemble=Harmonia”

ごあいさつ

本日はお忙しい中、保科アカデミー室内管弦楽団第9回定期演奏会に御来場頂き、誠に有難うございます。

昨年の第8回定期は、備前・倉敷の県内2公演に加え、創立10周年記念として初の東京公演(中央区晴海・第一生命ホール)も企画いたしました。テノール・オーボエ・ヴァイオリンの三名のソリストを迎えた盛りだくさんなプログラムで、シーベルト、ベートーヴェンに並んで、保科先生の作品も演奏いたしました。幸い県内はもちろん、東京公演におきましても、予想をはるかに上回る大勢の方々にご来場頂き、暖かい拍手と励ましを頂戴し、メンバー一同大変感謝しております。

今回は、来年生誕250年を迎えるモーツアルトの最後の2つの偉大な交響曲と、今年没後30年・来年生誕100年を迎えるショスタコーヴィチのピアノ協奏曲第1番を演奏いたします。後者はトランペット独奏を要し、伴奏は弦楽合奏のみという珍しいスタイルの協奏曲です。ピアノ独奏の有森氏は岡山ご出身で、ショパンコンクール入賞をはじめ輝かしい経歴をお持ちの現代日本を代表する若手ピアニストです。トランペット独奏の服部氏は現在新日本フィルハーモニーの首席奏者としてご活躍中でございます。昨年のサイトウ・キネン・オーケストラ・ヨーロッパツアーでご一緒だったことがきっかけとして今回のお二人の共演が実現いたしました。

モーツアルトの交響曲に関しては古今東西数々の名演奏がありますが、あくまでアカデミーらしさを追求して練習を重ねてまいりました。『保科理論』をベースにしていることはいうまでもありませんが、モーツアルトの交響曲のもつ多彩な表情を描きわけ、特にその斬新さを強調したいと考えています。「ただただ美しく、ひたすら心地よいモーツアルト」とは一線を画す演奏になるかも知れませんが、200年を超えて演奏し続けられる名曲中の名曲を、しっかりとお楽しみ下さい。

忙しい社会人が中心のため、月に一度の練習だけでは、なかなか理想通りにはいきませんが、逆にその分集中し、『保科理論』という音楽文法を最大限に利用し、理論的に能率よく練習するという方針を守ろうと思います。運営方法、選曲内容、演奏解釈、練習形態、練習時間などのあらゆる点でこのオケは極めて個性的なアマチュア音楽団体であると自覚していますが、こうして広く皆様に演奏を聴いて頂き、御批判を仰ぐことにより、閉鎖的、自己満足的な団体に留まらないようにしたいと思います。そして岡山大学交響楽団のOBとして、また快く名前の使用をお許し頂いた恩師保科洋先生の名に恥じないような解釈・演奏を目指したいと思います。

最後になりましたが、今回の演奏会開催にあたりまして多くの方々にご協力頂きました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。引き続き今後ともよろしく御指導御鞭撻を賜りますよう重ねてお願い申し上げます。

それでは最後までどうぞごゆっくりお楽しみ下さい。

保科アカデミー室内管弦楽団
“アンサンブル＝ハルモニア”
主宰 秋山 隆

2005/ 9/25 [日] 久世エスパスホール

主催:(財)久世エスパス振興財団

2005/10/16 [日] 倉敷市芸文館

主催:保科アカデミー室内管弦楽団

後援:保科アカデミー室内管弦楽団後援会

プログラム

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791) / Sinfonie in g, KV 550

☆モーツアルト／交響曲 第40番 ト短調 K.550

I. Molto Allegro

II. Andante

III. MENUETTO Allegretto TRIO

IV. Allegro assai

Dmitri Shostakovich (1906-1975) / Concerto for Piano, No. 1, in C minor, Op.35

☆ショスタコーヴィチ／ピアノ協奏曲 第1番 ハ短調 Op. 35

I. Allegretto

II. Lento

III. Moderato

IV. Allegro con brio

Hiroshi Arimori, Piano Solo

ピアノ独奏：有森 博

Takaya Hattori, Trumpet Solo

トランペット独奏：服部孝也

< 休憩 >

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791) / Sinfonie in C, "Jupiter-Sinfonie" KV 551

☆モーツアルト／交響曲 第41番 ハ長調 K.551『ジュピター』

I. Allegro vivace

II. Andante Cantabile

III. MENUETTO Allegretto TRIO

IV. Molto Allegro

* * *

Takashi Akiyama, Conductor

指揮：秋山 隆

Aki Washino, Concertmaster

コンサートマスター：鷺野亜紀

The Hoshina Academy Chamber Orchestra "Ensemble=Harmonia"

保科アカデミー室内管弦楽団“アンサンブル＝ハルモニア”

曲目解説

☆モーツアルト／交響曲第40番ト短調 K.550

(演奏時間: 約30分)

——おれの尻をなめろ！ お馬鹿さん アハ…アハハ(笑)——

今年も9月に差しかかり、曲紹介の原稿の締め切り(8月末まで)が大幅に過ぎている…(汗)。そんなある昼下がり、ぼくは彼のこんな声を聞きました。赤いチョッキを着て、二重まぶたをパッチリと開いたモーツアルト。バックにはト短調の第4楽章Allegro assaiが鳴っている。「なんのこと…？」ぼくがたずねると——その姿はヒヨイと消えてしまった……。次の瞬間、ぼくは目が覚めた。二日酔いの軽い頭痛がした。

ところで、(私事で恐縮ですが)夢の中で流れていたこの第4楽章——なにを隠そう、これは高校1年当時の山本少年をオーケストラの世界へと導き入れた、張本人なのであります。音楽担当の松本先生はとてもんきなお方で、午後の2時間続きの授業の半分をまるまる鑑賞の時間と銘打って〈公然と〉お昼寝タイムとする、まさに懐の深い先生でした(先生自ら熟睡モード、もちろん感想文なんかもナシ…!)。その日も音楽室全体がゆる~い感じでウトウトしておりました。と、ある瞬間(ブゥーッ)——誰かが…やってしまったんですね。安眠が妨害されて周りがざわつく中、鳴り続けるモーツアルト——このときです！ モーツアルトにしては何か耳馴染まない、ヘンテコリンなメロディがぼくの耳をとらえました——「えっ！？ これがモーツアルト？」

小遣いの5千円札をポツケに入れてCD屋さんのクラシックコーナーに初めて足を踏み入れたのは、その週末のことでした。どうしても気になって、その部分をもう一度聴いてみたいという気に駆られてのことでした。こうしてぼくのクラシック元年が華々しく(?)幕を開けたワケです。

で、ここからが本題なのですが……山本少年の耳を直撃したそのヘンテコなメロディというのは、この曲の第4楽章展開部が始まるところのことを言ってます。この部分は(もちろんこれは後で知ったことですが)開始5小節間の15個の音のうちでなんと！(オクターヴ内にある12個の音のうち)11種類の音が使われているのです。20世紀に生まれた作曲技法であるところの「12音技法」が、いち早くモーツアルトによって試みられていたのではないか！なんて言われたりもする部分でもあります。ただし、やはり音が1つ足りない不完全性(?)ゆえもあってか、その見解は必ずしもメジャーではありません。ですからぼくは、(これはよくある空想ですが)もしもタイムマシンが出来てモーツアルトに会えるとしたら、こう言ってあげたい！と思っていたのです――

「展開部開始部分であなたがあとたった1つの音を使わなかったのがホントに残念です。この部分で12音すべて使っていたら、後世の人々はそのことでもっとあなたを称賛したでしょうに…！」

ところで、「夢は着想の泉である」とはユングの言葉です——要するに、夢さえ見ていたら、例えば実際に紙にペンを走らせないでも(曲紹介を早く書かなければという切迫した気持ちさえあれば)書いているのと同じということです。では、最初に紹介した(ぼくが見た夢)はいったい何だったのでしょうか？ ぼくが展開部開始部分で思っていたことへの、モーツアルトからの返答なのでしょうか？ 仮にそういうことにして、それを膨らませて書けば原稿が埋まるとしてもうのでしょうか？ それならば――

とりあえずスコアを広げて、その問題の部分とやらめっこしてみる。この、猫が鍵盤を歩いて偶然鳴ったかのようなく(たらめ)に並んだ音を、ぼくも鍵盤で一つずつ押していく——オクターヴ内の音がみるみる埋まっていく。が、たしかに(ソ)の音だけ足りない。(ソ)はト短調の主音だ。曲の中で最も多く使われて当然の音だ。ここで使われるのは不自然だ。ということは……逆に意図的に避けられていると考えた方が自然か？(ここでしばらく思考停止…)別のアプローチでいってみよう。モーツアルトが楔のスタッカートをつけた音は、特に大切な音のはずだ。だから、まずこれを抜き出してみよう。(ここで思ひぬ発見！)おお、連続する3つの音が全部キレイな和音になっている！しかも出てくる順番が規則的だ。なんてこったい！(でたらめ)じゃなかったんだ……。待てよ、この規則に従っているのは8小節目までだな。もしもこのまま続けたとしたら……(ソ)の音が出てくるのが……えーと、10小節目か。全体として見たら確かに調性の確立は避けられてるんだけど、でもそこまで行ったらダブルの音もかなりあるし、「12音技法」とはほど遠いな。やっぱりモーツアルトにそれを求めるのは御門違いなのかなあ。ああ残念。

そんなことを考えていて、ふと「そうだった。〈夢〉のことすっかり忘れてた…」と気付きました。彼、〈おれの尻をなめろ〉って言ってたな。そういうえばモーツアルトに、そんな題名の曲があったな。それを聴けてこと？ いや違うな。〈夢〉で見たことはいわゆる(象徴)だから、記号論的に解釈しないといけないんだった…。まずは〈おれ〉の解釈——その時バックに流れていたのがこの曲だし、たぶん(おれ=第4楽章)でいいよね。次に〈尻をなめろ〉だけど——(またしばらく思考停止…)ん！ そうか、(曲の)尻だから、第4楽章の終わりってことだ。終わりには何がある？ 繰り返し記号がある。〈尻をなめろ=繰り返せ〉これだ！ つまり(第4楽章で最後の繰り返しをしろ！)ってことだったんだ！！モーツアルトの多くの作品でそうですが、曲の前半で一度[最初に戻る]繰り返しがあり、曲の終わりで[展開部に戻る]繰り返しが指示されています。そして演奏するにあたっては多くの場合、後半の繰り返しは省略されるのが慣例です。だから気付かなかつたんだ！ 曲の最後の音はもちろんト短調の主音であるところの(ソ)の音です。

曲目解説

つまり——最後の繰り返しをすることによって初めて——モーツアルト流の「12音技法」が完成される、というわけなのです!!!
(今日の演奏でも、もちろん「繰り返し」やります！)

ありがとうございます、夢に出てきてくれたモーツアルト君！ なんだかんだで「ト短調」の曲紹介なんとか書けましたよ。でもね、実は曲紹介があと2曲残ってるんだよ。もう書くスペースあんまり残ってないし……どうしてくれる(怒)!!!

☆ショスタコーヴィチ／ピアノ協奏曲第1番ハ短調 Op.35

(演奏時間: 約20分)

——というわけで、ごく簡単に…。ショスタコーヴィチ27歳の時の作品。編成は、独奏ピアノ+独奏トランペット+弦5部。全体は4楽章からなるが、切れ目なしに演奏される。演奏時間 約20分。ショスタコーヴィチは、1927年の第1回ショパン国際コンクールで2位に輝いた実績を持つ男。このピアノ協奏曲第1番も彼自身のピアノで録音が残っています(EMIより大好評? 発売中)。

えつ、これだけじゃ内容がさっぱり分からぬ？ では、ざっと曲の流れを紹介しましょうか——まずピアノのすばやい下降音型と共にラッパが高らかに曲の開始を告げる。続いてピアノが一人で主題を提示する。ここで耳のこえた聴衆は、ベートーヴェンの『熱情』の主題の引用に「おや！」と思い微笑む(これは彼のサービス精神だということです—これホントの話)。気付かなかった残りの聴衆も「おや！ 引用の箇所はもう過ぎてしまったのかな？」と思い苦笑できる。しばらくすると今度は弦だけで同じ主題が歌われる。ここまでは緊張した雰囲気で、抑えた感じのやりとりだ。そして間もなく、ピアノの挑発がきっかけとなって激しい展開となる。終始ピアノが優勢だが、弦楽器群も変態的な技を使って応酬し、負けてはいない。それで両者の闘いを冷静に見つめていたラッパが、レフリーのように間にに入る。「ファイト！」の合図で再びピアノと弦の闘いが熱を帯びる。しばらくしてついに両者力尽きたか、まず弦が頭から床に崩れ落ちる。これは危険な状態だ！ ピアノの方は？ ——「辛うじて立っている状態です！」 2楽章——弦は氣を失って夢を見ている。ピアノとラッパの声が遠くから微かにきこえて来る——「おれはこのまま負けてしまうのか？」 3楽章——勝利を確信したピアノは、すでに回復して小躍りしている。とその時、悲壮なテーマに支えられて弦が立ち上がる。その目には闘志がみなぎっている。「まだ闘える！」 4楽章——ピアノと弦の闘いはここに来て最高潮の盛り上がりだ！ 激しさのあまりレフリーの制止もきかず反則攻撃の嵐。そしてついにレフリー怒りの参戦！ 3者入り乱れての場外乱闘だ。ラッパがくり出した古賀直伝の一本背負いは不完全ながらも、そのまま弦を抑え込みにかかる(ちなみに今TVでは世界柔道が放送されている)。揉み合っているラッパと弦を目がけて、ピアノがフライングボディアタック！ 最後はピアノの華麗なフリー・キックをヘディングで押し込みラッパの勝利に終わる。そんな曲。

☆モーツアルト／交響曲第41番ハ長調 K.551《ジュピター》

(演奏時間: 約35分)

この交響曲——《ジュピター》という愛称がつく以前は「終結フーガ付き交響曲」と呼ばれていました。それほど、終楽章に織り込まれたフーガの手法が誰の目から見ても圧巻だったのです。交響曲は、その歴史をはじめてこのかた、このようなフィナーレを経験したことはありませんでした。この交響曲をして記念碑的に有名ならしめているのは、いうまでもなくこのフィナーレなのです！ ですので、ここでは終楽章のみに限ってお話をすることにいたします。

終楽章はまず、〈ドーレーファーミ〉という動機で始まります。これは通称〈ジュピター音型〉と呼ばれるものですが、モーツアルトにとってこの音型は生涯のテーマでした。彼が8歳のとき初めて作曲した交響曲第1番では既にその音型がホルンによって奏でられていますし、ミサ曲(小クレドK192や大クレドK257)などでもこの音型がしばしば使用されています。特に小クレドの方は(フーガにはなっていませんが)明らかに、このフィナーレのもとになっている曲だと断言できます！(あまり録音がないけど、《ジュピター》好きなら是非でも！ 女房を質に入れてでも！ 買って聴くべし！ これを知らなきゃモグリだよ……って、何の?) そしてこの〈ジュピター音型〉はシンプルなだけに印象深く、終楽章を通じてここぞという場面で登場し、ときには高貴に、ときには荒ぶる響きで雄弁に語りかけます。そして驚愕のラスト！ ——この楽章で出てくる5つの主題が全部なだれ込んでのドンチャン騒ぎ！ それが1分も続くのです！ そして5通りの動機を組み合わせた神業のごとく複雑な織物の中から〈ジュピター音型〉が浮かび上がり、見事と言うほかない堂々たる結尾で曲は締めくられます。

最後にちょっと余談——古くはグレゴリオ聖歌に起源を持つともいわれる〈ジュピター音型〉ですが、後の音楽家にも様々な影響を与えています。例えばブラームスは生涯に4曲の交響曲を作曲しましたが、その主調を順に並べると[ハ短調、ニ長調、ヘ長調、ホ短調]と、〈ジュピター音型〉でその壮大な交響曲の調性を組み立てていたことが分かります。ベートーヴェンの後継者として有名なブラームスですが、このことからも彼がモーツアルトを非常に愛していたことがうかがえます。そんな彼が残した言葉——「モーツアルトのような、最良の音楽のよさは必ずしも誰にも分かるわけではない。私たちの音楽が世間にもてはやされるのは、そのおかげです——ヨハネス・ブラームス」

<文責: 山本浩之 H.11卒部ピオラ>

プロフィール

有森 博 (ありもり ひろし)

ピアノ独奏



1992年東京藝術大学大学院修了。野上登志子、水本雄三、小林仁、ナターリヤ・スースロワの各氏に師事。1990年第12回ショパン国際ピアノコンクール最優秀演奏賞。1991年岡山県芸術顕彰を受賞。1992年第5回シドニー国際ピアノコンクール第4位。1994年第10回チャイコフスキーコンクールピアノ部門入賞。1996年から2000年にかけてラフマニノフのピアノ作品全曲演奏会を成し遂げ、2001年にはプロコフィエフのピアソナタ全曲演奏会を成功させるなど、ロシア作品に積極的に取り組み独自の活動を展開している。1995年、2001年に小澤征爾指揮新日本フィル、2003年にはアレクサンドル・ラザレフ指揮日本フィルと協演の他、東京シティフィル、読売日響、九響、関西フィル、山形響、ワルシャワフィル、ボーランド放送響など、内外のオーケストラと協演を重ねる。これまでに4枚のCDがリリースされ、2003年1月ファンティックより発売の「プロコフィエフ・ピアソナタ」はレコード芸術特選となるなど各誌で絶賛される。2004年には小澤征爾指揮サイトウキンオーケストラのメンバーとしてヨーロッパ6カ国ツアーアジ日本公演に参加。2005年8月に「ムソルグ斯基：展覧会の絵」ほかを収録したCDがファンティックより発売されレコード芸術特選となった。

今回保科アカデミーのコンサートでショスタコーヴィッチを協演させていただくことをとても楽しみにしてきました。ショスタコーヴィッチの協奏曲はとても興味深い作品ですがなかなかコンサートで演奏されることがない作品です。この度保科アカデミーの皆さんと演奏する機会に恵まれ、いつにも増してワクワクしています。トランペットは去年サイトウキンオーケストラで一緒に弾いた服部さんが快く引き受けてくださいとても心強いです。この協奏曲を初めて聞かれる方も多いかもしれませんのがショスタコーヴィッチの刺激と一緒に感じて楽しんでいただけたらと思います。 有森 博

服部 孝也 (はっとり たかや)

トランペット独奏



愛知県名古屋市出身

1993年愛知県立芸術大学音楽学部卒業、

桑原賞受賞、読売新人音楽賞受賞。

同年新日本フィルハーモニー交響楽団に入団。

1999年アフィニス文化財団海外研修生として、

ニューヨークのマネス音楽大学で学ぶ。

パンフィックミュージックフェスティバル、アメリカ

アスペンミュージックフェスティバルにも参加。

ソリストとしても新日本フィルと度々共演している。

トランペットを 竹本義明、津堅直弘、クリス・ゲッカー、

ヴィンセント・ベンザレラの各氏に師事。

現在、新日本フィルハーモニー交響楽団首席奏者、

愛知県立芸術大学非常勤講師。

本日は、保科アカデミー室内管弦楽団と協演させていただきまして、とてもうれしく思っております。先日久世公演で自分の出番が終わったあと、客席で演奏を聞かせていただきました。自分も昔名古屋にある子供オーケストラで育つことを思い出しました。毎週練習が楽しみで、本当に音楽が好きだったんだなあ!?あのころは!??

このオーケストラのかたがたが本当に音楽が大好きなひとたちで、そんなかたがたが音楽に取り組む姿勢を見ていて本当にすばらしいなあと思います。そんな方たちと一緒に演奏することが、とても楽しいです。いつまでも音楽を愛する心を大切に、ますますのご発展をお祈りします。 服部孝也

プロフィール

保科 洋 (ほしな ひろし)

名誉指揮者・音楽総監督



昭和11年東京に生まれる。両国高校卒業後、昭和29年東京芸術大学作曲科に入学。昭和35年同大卒業とともに、毎日コンクール作曲部門管弦楽曲の部第一位入賞。昭和38年には、文部省芸術祭奨励賞受賞。東京音楽大学、愛知県立芸術大学を経て、昭和58年兵庫教育大学教授。平成13年3月定年退官し同大名誉教授となる。作曲・指揮の両面で活躍。

吹奏楽の作曲においては、日本を代表する一人で、海外でも評価は高い。全日本吹奏楽コンクール課題曲も過去3回委嘱されている。

作曲家としての見地から、また多くのアマチュア音楽団体の豊富な指導経験と、理論的根拠に基づく独自のユニークで説得力のある音楽解釈は、近年注目を集め高く評価されている。それらの集大成として音楽の友社より『生きた音楽表現へのアプローチ』=エネルギー思考に基く演奏解釈法=(保科 洋著)が出版されている。類書のない理論的音楽解釈法として、アマチュア音楽愛好家はもちろん専門家の間でも評判になっている。

主な作品に、「カタストロフィ」「古祀」「吹奏楽のためのカプリス」「愁映」「風紋」「パストラーレ」「祝典舞曲」「饗宴」「管弦楽のための変奏曲」、創作オペラ「はだしのゲン」などがある。

秋山 隆 (あきやま たかし)

常任指揮者



昭和40年岡山市に生まれる。高松中学校吹奏楽部にて奥原弘巳氏に指導を受け当時新設の岡山一宮高校に進学。昭和58年岡山県では初の学生指揮者による吹奏楽コンクールA部門金賞受賞として注目される。

昭和59年岡山大学医学部入学と同時に、岡山大学交響楽団にトランペット奏者として入部。現役時代には学生指揮者を務め、昭和62年の第2回全日本大学オーケストラコンクール第1位獲得に貢献する。卒部後サブコンダクターとして、常任指揮者保科洋氏のアシスタントを行い今日に至る。

平成6年当団を同級生後輩らと独自に組織し、責任者兼指揮者として活動。第4回定期演奏会後、医学部助手を休職しアメリカ留学(カリフォルニア大学バークレー校客員研究員)。その間当団も活動を停止。帰国後活動再開。

トランペットを鈴木勝久氏に師事。指揮法を奥原弘巳氏、保科洋氏、David Milnes 氏に師事。

平成14年10月より川崎医科大学病理学教室講師として現在に至る。医学博士、病理専門医。夫人は当団ビオラ奏者。二児(中3男・小6男)の父。

鷺野 亜紀 (わしの あき)

コンサートマスター



旧姓:盛田。5歳より(故)木村善之氏にヴァイオリンを師事。

岡山一宮高校卒業後、岡山大学文学部言語学科入学と同時に岡山大学交響楽団に入部。同団コンサートマスターを務め、第38回定期演奏会ではサン=サーンス作曲『序奏とロンド=カプリチオーソ』を共演し好評を博す。

当団発足時からのコンサートマスターであるとともに、岡山交響楽団及び岡山大学OB交響楽団でもコンサートマスターを歴任し、遺憾なくその才能を発揮している。『アンサンブル=アルケミー』における室内楽の分野でも高い評価を受けている。

第5回定期においては、チャイコフスキイ作曲／組曲第4番『モーツアルティーナ』終曲、第6回定期ではベートーヴェン作曲『ロマンス』でも素晴らしい独奏を披露し、絶賛された。

当団トランペット奏者鷺野氏と結婚後、島根県に居住。一児の母。

現在、島根県立松江東高校英語科教諭。同校弦楽部顧問。

モーツァルトは遙か遠方に

西 欣也

ほとんど何も身に纏わぬその痩せ細った人物は、じっと立ち尽くしているけれども、無気力ではなく、怯えてもいません。むしろ表情には柔らかく温かいところがあるほどです。ただ、その人の頭を離れない激しい観念があって、時おり、脈絡のない昂揚感が頬を紅潮させます。その人の心をとらえるのは、全ての人々の幸福への望みなのですが、まるで自分の切実な願望が叶うときに大きな荒廃と犠牲が生じるというように、期待と危惧が入り交じります。

どこか不安定なショスタコーヴィチの旋律が、ほとんど剥き出しの姿で延々と歌われたり、突発的に現れる無理に朗らかなメロディーや、よそよそしい勇壮さと交錯したりするのを聴いていると、私の脳裏には、このような人物の様子が思い描かれます。ハ短調のピアノ協奏曲についても、私の印象は変わりません。湿った秋の午後の曇り空のようなレントも、騒々しく、ちぐはぐに聞こえるアレグロも、なにか謹厳なシンパシーを感じさせます。ベートーヴェンをもじったようなフレーズから、ハイドンやマーラーの断片のほか、威勢のいいオデッサ歌謡やジャズ、ミュージックホール用の音楽まで、脈絡なくつなぎ合わされていても、そこに少しも能天気なところなどなく、病床に伏す友人の口から卓抜なユーモアを聞くときのようなやりきれなさを感じるのは、私だけではないでしょう。マーラーの音楽の中で次々に起こるエピソードの繋ぎ合わせとも、ラヴェルによるラグタイム・ピアノの使用とも違う発想の表現がここにはあります。一つ一つのファクターについてだけ言えば、ショスタコーヴィチ自身、たとえばジャズを悪趣味なものと見なしていたということです。そのジャズをもモチーフとして利用しながら、彼にしかできない或る種の音楽を創り出すことを、ショスタコーヴィチは自らの使命と考えたわけです。その結果生じたものについては、もはや彼自身も言葉によっては解説することができず、音楽自身が説明する以外にありません。事実、彼は初演当時にこう語ったと伝えられます。「このコンチェルトの根本主題は何か？ 多くの作曲家がやるように、何の抵抗もなく作曲内容を翻訳して、ほかの芸術領域から持ってきた定義を与えてたりするのは浅はかなことだ。私は自分のコンチェルトの内容を記述するのに、コンチェルトが実際に書かれた手段を用いる以外の仕方ですることなどできない。」

15歳のモーツアルトは、父親への手紙の中で、自分は詩人ではないから言葉でうまく考えを表現することはできない、画家でないから陰と光の描写もできない、舞踊家でないから手振りや身振りでもって気持ちを表すこともできない、ただ音でならできる、自分は音楽家だから、というふうなことを伝えています。モーツアルトの言おうとしていることは、音楽そのものによってしか作品を記述できないというショスタコーヴィチの発言内容とよく似ていますし、作曲家は皆このように言葉よりも「音自体」を信じて仕事をしているものなのかも知れません。しかし、この二人の芸術家の精神が音に関わる仕方の、なんと違っていることでしょう！

というのも、音の協和という観点からすれば「俗物」に過ぎないような素材を、幾分不自然ながらも、一つの独自の世界へと構成してゆこうとする芸術家の「誠実さ」と「使命感」、こうしたもののほど、モーツアルトの音楽から縁遠いものはないように思われるのです。私たちの誰もが知っているように—そして本日の演奏会でも、皆さんが再び新たな驚きをもって感得されるであろうように—モーツアルトの音楽は、音による調和の極点を示しています。もちろん、調和を可能にするための対比や大胆な変化や意外さが一瞬ごとに聴く者を掴みますが、それらは必ず、信じがたい典雅さでもって、完全に自然な音楽の瑞々しい流れの中へと統合されてゆくのです。その音楽の完全性は、もはや私に、いかなる人物像を連想することも許しません。私だけではないはずです。モーツアルトの音の世界の中に人々が見いだすのは「天空」であり「恩寵」であり、人間に似たところで「天使」あるいは「デーモン」、せいぜいが「幼児」であって、そこには使命感を帯びた成熟した人間の自意識が介入する余地などなく、日の輝きや草花の生長のように自ずと、美そのものが展開するように聞こえるわけです。この、かつて人々がモーツアルトと名付け、今日イタリア人が《あの怪物的才能》と呼んでいる驚くべき結合において、肉体の占める部分はあたうるかぎり少なかった」というスタンダールの言葉は、肉体を持つ人間としてのモーツアルトが作品そのものに比べてとるに足らない存在だということを述べているわけではなく、作品

そのもののもつ完全・絶対・無限の様態が凡そ個人としての人間の関与を感じさせないように出現するということを、言い当てているのではないでしょうか。

モーツァルトの生きた時代は、芸術としての音楽が、このような自然な美しさを求め、また実現することでのてきた、歴史上唯一の時代でした。これまでに人類が成してきた創造行為の中で、モーツァルトの音楽の美が最高の達成に属すことを疑う人はありませんが、しかし彼の天才をもってしても、どのような歴史的条件下でも同じように開花したわけではなく、ほかならぬ18世紀の後半に生を受けるという偶然の助けがなかったら、あれほど十全に展開されることはなかったと思われるのです。かりに、わずか50年後に生まれただけで、彼は、実際に彼が要請されたのとは全く異なる努力をしなくてはならなかつたことでしょう。何故そういうことが言えるか？

モーツァルトが作曲をおこなった時代の直後から、芸術は芸術家の人間的使命というフィルターを通してしか、真正の価値を受け取れなくなつたからです。

この歴史的転換が、モーツァルトの音楽の超人間的な美しさと、ショスタコーヴィチの音楽の人間的な誠実さとを隔てています。それどころか、芸術における「人間」さらには芸術家「個人」の使命が、モーツァルト以後、少なくとも20世紀の中葉までの音楽を、それ以前のものから切り離す指標となっているのです。音楽史においては、その革命的な変容は、ベートーヴェンという人物によって具現化されています。「眞実を言うためには、侵してはならない美の法則など、一つもない」というベートーヴェンの宣言は、音楽家が自らの内面を掘り下げるなどを経由せずに天上的な調和美を達成することが無意味になった事実を象徴しているのです。（もっとも、より正確に言えば、芸術家の深刻な内面性は既にモーツァルトの創作にも影を落とし始めているのであって、人は例えば彼の「ハイドン四重奏曲」をハイドン自身のもっと明朗な音楽に比べるとき、前者がはっきりと個人主観の深みに発していることに気づかずにはいないでしょう。）その結果、美醜はもはや眞実ほどに重要ではないという考え方、ショスタコーヴィチをも依然として支配していますし、私たちの意識にも取り憑いたままであるようです。だからこそ私たちは、モーツァルトの音楽の内で、かつて喪失され、永遠にとり返しのつかない純粋無垢な神性と出会い、それに魅了されるのではないかでしょうか。

モーツァルトを過ぎる頃から、芸術史は、個人の自意識の世界にしっかりと根を下ろします。ところが、モーツァルトの音楽の絶対的な美しさを賞賛し、それに敬意を払う人々の中には、そのような歴史の進み行が、なにか不純なものによって穢されたかのように慨嘆するような向きもあります。たとえば小林秀雄がそうです。彼はモーツァルトの死後、ロマン主義音楽の時代に言葉やセンチメンタルな情感が音の世界に侵入してきたことを苦々しく振り返っています。モーツァルトの音楽の本質が「悲しみ」にあるとするスタンダードの主張に反感を抱き、同時にアンリ・ゲオンの「疾走する悲しみ」という語句に触発されて、「涙は追いつかない。涙の裡に玩弄するには美しすぎる」云々のくだりを書いたのも、彼がモーツァルトを人間臭い感情やロマンティシズムを超えたところに置こうとしたからにはほかなりません。

しかし、歴史とは、いったん進んでしまえばとり返しがつかぬもの。しかも、後戻りができないとなれば却つて失われたものへの執着に捕われるというのが、人間精神の愚かしさです。そうだとすれば、現代社会に生きながら、永遠に失われた純粋さにこだわる小林秀雄の姿勢は、それ自体が少々ロマン主義的ではないでしょうか。誰もが充たされない内面を抱えて不安定に生きていかなくてはならない時代に存在している私たちは、モーツァルトの至上の音楽によても、瞬時の慰め以上のものは得られず、同時にだからこそその瞬時の輝きがかけがえのないものとなるというのは、皮肉なことです。ですが、芸術家であれ、批評家であれ、もし彼（女）が責任ある聰明な人物なら、必ずこの皮肉を見据えて仕事をするでしょう。そのような人々は、モーツァルト的な純粋無比の美が現代生活を母胎として産み出されるかのような幻想が、無意味であるばかりか恥ずべき成果をもたらしかねないことを知悉しているからです。そうして私の中では、それぞれに悲愴な運命に見舞われながらもこうした人々が自らを支えようとする姿が、冒頭に述べた人物像に重なっているのです。

過去の演奏曲目

1994/8/7 [日] サンパルホール沼隈(福山市)

＜チャリティーコンサート＞ 指揮:秋山 隆

☆ベートーヴェン／交響曲第1番ハ長調 その他

1995/7/29 [土] 備前市市民センター

＜木村病院開設 15周年記念特別演奏会＞

☆モーツアルト／歌劇『劇場支配人』序曲 K. 486

☆モーツアルト／ディベルティメント ニ長調 K. 136

☆ベートーヴェン／交響曲第1番ハ長調

1995/8/6 [日] 倉敷市芸文館

＜第1回定期演奏会＞ 指揮:秋山 隆

☆モーツアルト／歌劇『劇場支配人』序曲 K. 486

☆チャイコフスキイ／ロココの主題による変奏曲
(チェロ独奏:山崎 泉)

☆ベートーヴェン／交響曲第1番ハ長調

1996/8/17 [土] 三木記念ホール(岡山市)

＜第2回定期演奏会＞ 指揮:秋山 隆

☆モーツアルト／歌劇『ドン・ジョバンニ』ハイライト

☆モーツアルト／交響曲第 41 番ハ長調『ジュピター』

1996/11/9 [日] 兵庫県東条町コスミックホール

『中学音楽共通鑑賞教材』&『指揮法ビデオ講座』
ビデオ収録(指揮・解説:保科 洋)

☆ベートーヴェン／交響曲第5番『運命』 その他

1997/8/16 [土] 岡山市民会館大ホール

＜山本拓也氏追悼演奏会＞ 指揮:秋山 隆

第1部:保科アカデミー室内管弦楽団

☆ストラヴィン斯基／組曲『ブルチネルラ』より序曲
☆水田年紀／弦楽オーケストラと2つの独奏楽器の為の
『追憶』～T. Y. に捧ぐ～(委嘱作品・初演)

☆ラヴェル／『亡き王女のためのパヴァーヌ』

☆R. シュトラウス／『四つの最後の歌』より、
III. 眠りにつこうとして (ソプラノ独唱:岡崎 順子)

第4部:山本拓也『復活』オーケストラ

(保科アカデミー及び岡山大学交響楽団の
現役・OBを中心とする特別編成のオーケストラ)

☆マーラー／交響曲第2番ハ短調『復活』

第1楽章 第4楽章 第5楽章より(編曲:秋山 隆)
(アルト独唱:矢内 淑子 ソプラノ独唱:岡崎 順子)

1997/9/17 [日] 倉敷市芸文館

＜第3回定期演奏会＞ 指揮:秋山 隆

☆モーツアルト／歌劇『フィガロの結婚』序曲

☆同／VnとVaの為の協奏交響曲変ホ長調 K.364
(ヴァイオリン:松原 勝也・ヴィオラ:古川原 裕仁)

☆ベートーヴェン／交響曲第2番ニ長調

1998/8/23 [日] 倉敷市芸文館

＜第4回定期演奏会＞ 指揮:秋山 隆

☆ブラームス／『ハイドンの主題』による変奏曲

☆モーツアルト／ホルン協奏曲第2番変ホ長調 K. 417
(ホルン独奏:杉本 賢志)

☆メンデルスゾーン／交響曲第4番イ長調『イタリア』

2001/4/15 [日] 倉敷市芸文館

＜活動再開記念特別演奏会＞ 指揮:秋山 隆

☆テレマン／ヴィオラ協奏曲(独奏:古川原 裕仁)
☆バッハ／オーボエとヴァイオリンの為の協奏曲
(オーボエ:津上 順子・ヴァイオリン:篠崎 史紀)

☆モーツアルト／ヴァイオリンとヴィオラの為の
協奏交響曲変ホ長調 K.364
(ヴァイオリン:篠崎 史紀・ヴィオラ:古川原 裕仁)

2001/9/22 [土] 兵庫県東条町コスミックホール

2001/9/23 [日] 早島町『ゆるびの舎』

＜第5回記念定期演奏会＞

☆J・シュトラウス／喜歌劇『こうもり』序曲

☆保科 洋／管弦楽のための『懐想譜』(初演)

☆チャイコフスキイ／組曲第4番『モーツアルティアーナ』
より終曲 Vn Solo:鷺野亜紀(以上指揮:秋山 隆)

☆ブルームス／交響曲第3番へ長調(指揮:保科 洋)

2002/8/18 [日] 備前市市民センター

2002/9/14 [土] 久世町エスパスホール

2002/9/15 [日] 倉敷市芸文館

＜第6回定期演奏会＞ 指揮:秋山 隆

=ベートーヴェンのタベ=

☆『ロマンス』へ長調 (Vn独奏:鷺野亜紀)

☆ピアノ協奏曲第1番ハ長調 (P独奏:有森 博)

☆交響曲第3番変ホ長調『英雄』

2003/8/23 [土] 兵庫県東条町コスミックホール

2003/8/24 [日] 倉敷市芸文館

＜第7回定期演奏会＞ 指揮:保科 洋

☆ワーグナー／『ジークフリート牧歌』

☆レスピーギ／リュートの為の古代舞曲とアリア

☆ウェーバー／クラリネット小協奏曲(独奏:藤井一男)

☆ドビュッシー／『牧神の午後』への前奏曲

☆ラヴェル／『亡き王女のためのパヴァーヌ』

☆ラヴェル／『クーブランの墓』組曲

(ウェーバーは東条のみ、ドビュッシーは倉敷のみ)

2004/8/28 [土] 備前市市民センター

2004/8/29 [日] 倉敷市芸文館

2004/9/11 [土] 東京・第一生命ホール

＜第8回定期演奏会＞ 指揮:秋山 隆

☆シユーベルト／交響曲第3番ニ長調

☆シユーベルト(保科洋編曲)／『魔王』&『ます』
(テノール独唱:津上 崇)

☆保科 洋／『祈りそして戯れ～光のもとの～』
(オーボエ独奏:津上 順子)

☆保科 洋／管弦楽のための『懐想譜』(改訂版)

☆ベートーヴェン／ヴァイオリン協奏曲 ニ長調
(ヴァイオリン独奏:松原 勝也)

保科先生のこと

保科先生と初めて出会ったのは先生が39歳、私が18歳のときで今から30年前のことになります。

20歳も歳が離れているので、しかも先生は39歳にして半分が白髪という印象がありましたから当時の私から見ればすっかりおじさんで遠い人という感覚でした。もちろん中学、高校時代から吹奏楽をやってきたので兼田敏先生と並んで吹奏楽作曲界のビッグネームという認識はあり、そのことも私が勝手に感じている先生との距離感を大きくしていました。

地方のそれほど高くなかったレベルの中で吹奏楽少年をやってきた私にとって先生の指揮に接する体験は鮮烈でした。初めて音楽のすばらしさの本質を教えてもらったのです。18歳の春から本当に音楽に夢中になりました。それまではラップを吹くことが好きだったのですが、先生との出会いをきっかけに音楽を愛するようになりました。特にオーケストラ音楽を。

オーケストラの100人のメンバーが心の底から敬愛する指揮者の下、自発的自律的に心を一つに同じ瞬間に同じものを美しいと感じて感動をおぼえる瞬間の法悦感は他のなにものにも例えようがありません。

保科先生との距離感は岡山大学交響楽団の練習のたびに急速に縮まっていました。

先生の指揮の下での練習は月一回の週末、演奏会直前は1週間連続しておこなわれ、その当時先生は大学内の北東隅にあった合宿所に寝泊りしていました。

その合宿所の東端の部屋が先生の宿所で、私は先生のすべてを吸収したくて、そして先生のそばにいなければ必ず食事にありつけるので(当時わたくしは赤貧がありました)欠かさず同じ部屋で寝泊りしていました。夜の9時に練習が終わると練習場から合宿所に移動してまず食事。当時食事は合宿所内に炊飯器やコシロを持ち込んで団員が賄いをしていました。食事の間が先生から実にさまざまなお話を聞ける楽しい時間で、話題はもちろん音楽のこと。どのようにシューマンのオーケストレーションが描いて、いかにラベルやベルリオーズのそれが素晴らしいのか、などなど。それから先生のマージャンやビリヤードなど趣味の話。当時まだ珍しかったパーソナルコンピューターを購入されてプログラミングを試みられた話。宇宙物理の話。超常現象の話、時にはこっくりさんを実際にやってみたり。

先生のお話が魅力的なのはこんな風に話題がとても多岐に渡っていたのに加え、決して人を悪し様におっしゃることはなくまた野卑な話を決してされなかつたことから、お話を聞く者誰もが心安らかに話の輪に没頭できたからだと思います。

ひとしきりこんな話でわいわい盛り上がって食事が終わるとお風呂かテーブルを片付けてマージャンです。

先生はあまりお風呂は好きじゃなかった。放っておくと何日も入らなくても平気でした。1週間の長逗留になってそろそろ入つてもらわないと女子に嫌われそうかなあと思うころに、合宿所にあった大きな五右衛門風呂に水を張って薪で沸かして入ってもらいました。

有田耕司

燃料になる木が手近に無かつたときに近くの倉庫から木材を見つけてきて燃やしたら、美術部の絵画の枠包材でこっぴどく叱られたり、空手自慢の先輩が大きな木材に蹴りをいれて割ろうとしたところ古釘を踏み抜いて救急車で運ばれたこともあります。そんなドラマに先生は気づかず気持ちよさそうに湯に浸かっていました。

マージャンの場合はだいたい11時すぎくらいから始まって半荘4回、終わるのは朝3時くらい。先生は強かったです。技術ももちろん高いのですが運の強さも人並みではありませんでした。先生が本気を出するとまったく歯が立ちませんでした。

マージャンが終わるとせんべい布団で雑魚寝。今思い出しているのですが、確かに先生はお布団に入ると大きなおならをかましていましたと思います。

朝は練習が9時から始まるので8時過ぎには女の子の団員が朝食を用意して起こしに来てくれました。

先生の寝覚めは大変でした。目は覚めても布団の中ではしばらくぐずぐずしていてそのうち意味不明の宇宙語のような大音声を発します。しばらくくわめいでからむくつと布団の上に起き上がって座り込むと、今度はくしゃみを連発。くしゃみと同時に大放屁もしていましたが、女の子がそばにいるときには決してしない。くしゃみのあと鼻をかんでやっと布団から出て朝ご飯。たいていコーヒーとトーストとサラダとかハムエッグとかだと思うのですが、先生のコーヒーの飲み方は今思い出しても気分が悪くなる。コーヒーの水面から砂糖の山が露出するのではないかと思うくらい砂糖を入れる入れる。あれならコーヒーでなくともいいだろうと、毎朝思っていました。

でなわけでコパンザメのように先生に喰らいついでいるうちに先生との距離感はあつという間に縮まり、先生の当時大好物であった魚肉ソーセージのビニールの皮(先生はご自分では決して剥げない)を剥いて、先生が欲しいなと思い始めるジャストタイミングでお渡しできるところまでいったのです。

学校を卒業してからは1年に1回か2回お会いできるに過ぎなくなりましたが、お会いするとお互い39歳と18歳の昔にかえって少しばにかみながら話がぼちぼちと始まっています。先生も70歳に手が届く歳になりさがに今年の夏は大動脈をサイボーグ化する大手術を受ける羽目に陥りましたが、生来の運の強さから九死に一生を得てみごと婆娑にもうしばらくしがみつけるようになりました。

半年間はゴルフ禁止。ゴルフがとけたら岡大オケのOBでお祝いコンペをやろうとこないだ思ついたところです。でも先生にはまだまだ勝てないでしょうね。かくなる上はもっともっと長生きしてもらって87歳くらいになってよほよほのジジイで身体が動かなくなるころに是非勝ってやろうと、打倒保科洋計画をひそかに練り始めている今日このごろであります。

(ありたこうじ・S54年岡大オケ卒部(Tp)OB会副会長)

ショスタコーヴィチ=「現代のモーツアルト」? 山口勝之

ショスタコーヴィチに「現代のモーツアルト」という表現はどれほど適切だろうか。どこで目にしたかは忘れたが、私には最初のうちは受け入れられない言葉であった。早熟であつたため単に「神童」という意味でこの表現を用いたのかもしれないが、そうではないとすれば納得しがたい。第5番「革命」をはじめとする大規模な交響曲から聞き始めた多くの人にとって、ショスタコーヴィチとは、どちらかというとマーラーやブルックナーの系列に属する作曲家のイメージが強いはずである。仲間内では「ショスタコといえば仔バール(私の愛称)」と言われるほどショスタコーヴィチに傾倒している私だが、最初の頃は有名な交響曲から聴き始めていたことに変わりはない。

ショスタコーヴィチとモーツアルトとの類似性を感じたのは、本日演奏されるピアノ協奏曲第1番を聴いたとき(20年近く前)が最初だったような気がする。ショスタコーヴィチの作品の中で好きな曲を3曲挙げろと言われたら、3曲に絞るのにしばらく悩むと思うが、ピアノ協奏曲第1番がそのうちの1曲に入るには間違いない。ホルン吹きである私は楽器をコンパートしない限り永久にこの曲の演奏に参加できないのが非常に残念である。しかし、この曲との出会いは「何となく面白そうなCD」を店頭で見つけたからに過ぎない。息子のマキシム・ショスタコーヴィチが指揮して孫のドミトリ・ショスタコーヴィチJr.がピアノを弾いているという組み合わせに惹かれて、Chandosという当時出始めたばかりの際物を扱う怪しげなレーベル(現在では確固たる評価が定着しているが)に手を出した。貧乏学生だった当時はCDを1枚買うにも随分勇気が必要だったわけだが、これは私がこれまでに購入した千枚以上のCD全ての中でも、「演奏の素晴らしさ」「未知の名曲との出会い」の両面で5本の指に入る満足度の大当たりだった。このCDには弦楽四重奏曲第8番をルドルフ・バルシャイが編曲した「室内交響曲」も収録されていたのだが、ピアノ協奏曲とともに強い感銘を受けた。この2曲を聴いたとき、モーツアルトとは似ても似つかぬ響きの中に「モーツアルト的な何か」を感じたし、このCDに出会った後は弦楽四重奏やピアノ五重奏などの室内楽作品を次々と聴いて、「どこが?」と言われても説明しきれないけど何となく類似性があると感じ続けてきた。その「何となく」を今なら説明できそうな気がする。

作曲技法などの難しい話はさておき、モーツアルトとショスタコーヴィチを結びつけるものは「遊び心」だと思う。モーツアルトは人柄も楽天的であつたらしく、ホルン協奏曲の譜面にはロイドゲープという仲のよいソリストに向かって罵声とも励ましともつかない悪戯書きがあったそうだ。モーツアルトの作品そのものに現れる「遊び心」がどのようなものなのかは、現代人にはわかりにくい部分がある。モーツアルトは当時としては極めて斬新的な技法を用いたのだが、モーツアルトの音楽がその後の音楽のモデルとなつたために我々の耳には当たり前前の音楽にしか聞こえない。その当時の感覚での斬新さを感じるためにには山本君の書いた楽曲解説のようなものを読まなければならないのである。

さらに、モーツアルトの斬新さを隠しているもう一つの要素は、王侯貴族に気に入られなければ生活が成り立たなかつた宫廷音楽家としての立場があるかもしれない。斬新でありながらも、これまで聞き慣れた既存の音楽の流れに乗つたものでなければ受け入れられない。そんなことを考えると、私にはモーツアルトの音楽に次のようなメッセージが含まれているように聞こえるのである。

「君たち凡人にはわからないかもしれないけど、僕はこの曲の中でちょっとしたトリックを使っているんだよ。僕は種明かしはしないから自分で考えてね。わからなくても別にいいんだよ。ありきたりの音楽として聴いても美しく聞こえるように書いたはずだから。」

一方のショスタコーヴィチは今年が没後30年にあたる現代に非常に近い作曲家であり、他の作曲家に模倣されることによって生じる斬新さの風化がまだ起きていない。ショスタコーヴィチはモーツアルトとは対照的に気難しい性格であり、生涯人前で笑顔を見せるることはなかったとまで言われる。「交響曲は墓標である」というショスタコーヴィチ自身の言葉が残っている通り、交響曲には深刻なテーマを扱つたものが多いが、彼の室内楽作品には「遊び心」が溢れている。評論家諸氏はその遊び心に「諧謔的」という言葉をよく用いるが、それを私なりに噛み砕いて表現するなら「乾燥した笑い」であると言いたい。スター林時代に肅正を恐れながらの創作活動では、自分の思い通りに曲を書くことはままならなかった。そのことに腹を立てたり嘆いたりする変わりに、冷笑を浴びせているのではなかろうか。私には彼のメッセージが次のように聞こえてくる。「私は心から音楽を愛しているし、私の音楽を皆さんに聴いていただきたい。しかし、この時代は私に自由な創作活動を許してはくれはない。だから、私の真意は作品の奥深くに隠しておこう。そうすれば、音楽を解さないクレムリンの連中は私を肅正の対象にすることもないだろうから。それでも私の真意に気づいてくれる人が少しいはるはずだということを私は期待しているんだがね。」

「遊び心」「隠蔽工作」「天才ならではの超然とした態度」—200年の時を隔てた2人の天才を共通項でくるとしたら、この3つがキーワードになるのではないか。

本日の演奏会で、ショスタコーヴィチのピアノ協奏曲を初めて耳にしたとすれば、モーツアルトの有名な交響曲に挟まれたこのプログラムに脈絡の無さを感じるかもしれない。しかし、私がこの協奏曲を初めて聴いて新鮮な感動を得たときのように、ショスタコーヴィチはやはり「現代のモーツアルト」だと感じて頂けるなら、この選曲は成功だったと言える。

(やまぐちかつゆき H3年岡大オケ卒部 当田ホルン奏者)

棒振りのひとりごと

秋山 隆

＜40番＞ 当団ピオラ奏者で曲目解説をお願いしている山本氏の情報によりますと元々オケのチェロ奏者であったアーノンクール氏が指揮者に転向した理由のひとつに、この40番を自分の思うおりに演奏したかったことがあるそうです。事実彼の最初の録音は今聴いても鮮烈です！（発売当時は賛否両論を巻き起こしました。）ひたすら甘く、ロマンティックに穏やかに演奏することもできますし、それはそれで美しく、モーツアルトらしいかも知れませんが、我々は小編成ならではのメリハリの利いた演奏を目指しています。

＜有森氏＞ 氏とは岡山市ジュニアオーケストラ以来のお付き合いです。学生時代にミラノ・スカラ座東京公演を観にいったら会場でぱったりということもありました。それにもまして驚いたのは、カリフォルニア留学時にサンノゼでお会いしたことです。岡山市と姉妹都市縁組をしている関係で、2000年の春休みにジュニアオケがサンノゼ公演を行いました。サンノゼから北へ一時間ちょっとのパークレーから家族とともに駆けつけてみると、ソリストとして有森氏が帯同されていた次第です。その時の立ち話において、第6回定期でのベートーヴェンの1番と、その次は必ずショスタコの1番を取り上げるという密約（？）が締結されたのです。ちなみに次はベートーヴェンの「皇帝」で、その次は再度有森氏におまかせという約束です。乞うご期待!!

＜服部氏＞ 昨年サイトウ・キネンでご一緒であったことから有森氏にご紹介頂きました。ロストロボーヴィッチ氏の指揮で新日フィルをバックにこの曲の演奏経験もあると伺っております。昨秋東京でご挨拶がて一緒に食事をしましたが、私が元ラッパ吹きということもありとても話が弾みました。とっても気さくな方です。お盆にはじめて一緒に練習をいたしましたが、その音の素晴らしいこと！トランペットってこんな音も出せるんだと感激し、この定期が終わったら私も久しぶりにリハビリでもしようかと思つたくらいです。しかし、先日の久世公演での本番の凄まじさを間近で経験すると、やっぱりこれは私には無理だと悟りきった次第です。近いうちに是非ハイドンの協奏曲をお願いしたいと思っておりますが、そのときはよろしくお願いいたします。

＜ピアノ協奏曲＞ というわけで有森氏との「サンノゼの密約」後にスコアとCDを購入したのが2000年でした。以来私にとってこの作曲家のお気に入りの一曲となりました。ソリストお二人のスリングな掛け合いをどうぞお楽しみ下さい。伴奏の弦楽合奏は難しくて大変ではありますが、ソリストに負けないように楽しめたいと思います。

＜41番＞ ジュピターは第2回定期でもメインとして取り上げました。当初最低10年間は曲目をダブらせない方針でありましたが、昨年は保科先生の「懐想譜」を再演しましたし、創立10年を経過し、またモーツアルト・イヤーを控えていることもあり再挑戦となりました。結果的に例年以上に欲張った選曲となりましたが、弦楽器諸君は嬉々として練習を楽しんでいました。10年前と比べての客観的な評価は困難ですが、成長と変化を実感しながら練習を重ねました。まだまだ課題もたくさんありますが、交響曲の記念碑的作品で、まさに『ジュピター』と呼ばれるにふさわしいこの作品。アカデミーの今の演奏をお聞き下さい。

＜ショスタコーヴィチ＞ 学生時代にはなんとなく胡散臭さを感じて、書店での斜め読みで済ませていた『ショスタコーヴィチの証言』を最近全部読みました。依然真偽の問題もありますが、作曲家が生活し、音楽活動を行っていた時代の社会背景を想像するには十分でした。（とても理解するには及びませんが…）この作曲家と有森氏の共通点は、ショパンコンクール入賞者であるということです。そういうこともあり、有森氏は特別な親近感を感じておられるのだと推察します。私にとってこの作曲家との思い出は『祝典序曲』です。高校2年生の夏休みに、母校高松中学OB吹奏楽団の一員としてオーストリアでの音楽祭に参加する演奏旅行に出かけました。大統領ご臨席のその音楽祭開幕コンサートで、祝典序曲を演奏しました。日本人がオーストリアで、旧ソ連の没後間もない作曲家の作品を演奏したわけです。それが拍手喝采で迎えられたことを今懐かしく思い出しています。音楽祭の休みの日には近くのザルツブルクに小旅行して、典型的観光客としてモーツアルトの生家に感激したものです。そこのモーツアルテウム音楽院で後年私の妹がオーボエの勉強をすることになるなどとはそのときには夢にも思いませんでした。

＜モーツアルト＞ 来年の生誕250周年に向けて世界中で様々な企画が自白押しされていますが、アカデミーは一足先に取り組みました。一度聴いたら忘れるのできない優雅でかつ繊細な1楽章冒頭に、「疾走する悲しみ」と比喻された終楽章で有名な40番。ギリシア彫刻ともうたわれる均整のとれたその構成力で「ジュピター」と称される41番。保科先生は、「音楽において対比（コントラスト）は非常に重要である」とつねづね強調されます。第1主題と第2主題の対比、楽章毎の性格的な対比、そして40番と41番の対比。楽器編成に関して言及すれば、管弦楽作品におけるメリハリの要といえるティンパニとトランペットを欠いた40番。特に41番での両端楽章でのそれらの活躍ぶりと比較していただければ、40番の独特的な雰囲気がこれらの楽器がないことによる影響もあることが理解して頂けると思います。さらに加えて、クラリネットの有無も重要です。本日40番はのちにモーツアルト自身がクラリネットパートを加えた第2版で演奏いたしますが、41番にはもともとクラリネットパートがありませんし、追加も行われていません。ちなみにフルートはどちらも1管のみです。ファゴット、ホルンはどちらでも重要な役割を占めています。当団では弦楽器が少ない分、それら管楽器の活躍が相対的によくわかると思いますが、そのあたりの楽器編成の違いにもご注目頂けますと一層これらの名曲が楽しめると思います。

両者の違いをあえて比喩的に表現すれば、40番は人間のすぐそばにある大自然です。しかしながらその中心に近づくことはできません。間違いなくそのふもとにはたどり着いている実感があります。鬱蒼とした森のようであり、草原のようでもあります。しかし油断していると、まるで樹海をさまようようなイメージとなります。決して身の危険を感じるような環境ではありませんが、私たちは保科理論というコンパスで一步一步前進あるのみという具合です。41番は遙かに聳える大伽藍のイメージです。人知を超えた建造物の印象です。ひたすらまっすぐ進み、ようやく辿り着き、安心してゆったりと中に入ります。満足感に浸り、汗を拭いながらふと見上げれば、そこには遥かな大宇宙が広がっている。またもや放心状態です。

本日はその間にショスタコーヴィチの協奏曲が挟まれています。40番と41番を続けて聞くのと、間にこの曲を挟むのとでは相当印象が違うと思います。お口にあわないとお感じの方が多いかも知れませんが、本日は覚悟を決めて食わず嫌いをせずに是非挑戦してください。短時間に200年の時代と文化を飛び越えて音楽を楽しめるということは、考えようによつては実に贅沢で、かつ平和であることの証しではないでしょうか。本日の3曲の取り合わせですが、何れもがその魅力を発揮しつつ、かつ対比してお互いを引き立たせるようにお感じ頂ければ喜びです。個性の異なるものが互いに共存する素晴らしいを実感しながら、みなさまと時間を共有できたらと願っています。

＜保科先生＞ 実はこの夏、保科先生は大手術をお受けになられました。手術は大成功で経過もきわめて順調です。世の中には本当に運のいい方がおられます、保科先生は間違いなくそのお一人です。もっとも先生の場合は、常日頃の行いや人徳のなせる必然なのかもしれません。お忙しい先生ですから、いくつかの仕事や演奏会本番をキャンセルせざるをえなかつたのですが、岡山大学交響楽団やOBオケの演奏会には影響の少ない時期であり、不幸中の幸いであります。しばらく激しい運動は控えないといけないですが、手術した部位自体は半永久的に使用が可能だそうですし、今後益々お元気に指揮をお掛け頂けるものと確信しております。一刻も早く指揮台で暴れたり、ゴルフ場でかゝ飛ばしたいお気持ちはよくわかりますが、今しばらくはどうか穏やかにリハビリにお励みください。

=演奏会のお知らせ=

2005/12/10 [土]

＜岡山大学交響楽団第52回定期演奏会＞

岡山シンフォニーホール 18:30開演予定

指揮 保科 洋 秋山 隆

☆シベリウス／交響曲第2番

☆チャイコフスキイ／幻想序曲「ロメオとジュリエット」

☆ボロディン／『イーゴリ公』よりダッタン人の踊り

2006/2/11 [土・祝]

＜保科洋氏岡山大学交響楽団常任指揮者

就任40周年記念演奏会＞

岡山シンフォニーホール 15:30 開演予定

指揮 保科 洋

☆リヒャルト・シュトラウス／アルプス交響曲（OB演奏）

☆ベートーベン／交響曲第1番ハ長調（OB演奏）

☆ワーグナー／楽劇『ニュールンベルクのマイスター』

第1幕への前奏曲（現役とOBによる合同演奏）

=当団次回演奏会のお知らせ=

2007年新春の予定

＜第10回記念定期演奏会＞

岡山および東京公演の予定

指揮 保科 洋 秋山 隆

☆プロコフィエフ／古典交響曲

☆保科 洋／新作（予定）

＜竹中昭夫氏＞ 当団創設時からの主力メンバーであった竹中氏が本年5月に急逝されました。ゴルフのタイガー・ウッズ選手によく似た好青年でした。容貌だけでなく才能に恵まれていた点も似ていました。岡山大学交響楽団第44回定期におけるコンサートマスターとしての活躍も記憶に残りますが、当団では第6回定期の『英雄』で2nd Vnのトップを演奏したのが最後となりました。第7、8回は仕事がお忙しくご参加頂けませんでしたが、今回はモーツアルトだし何が何でも引っ張り出そうと相談していた矢先の訃報でした。あまりに突然のことでの言葉もありませんでした。夫人は岡大オケの同級生で、当団でもフルート奏者として活躍されました。ご長女誕生にて育児中でした。あまりにも早すぎるお別れです。謹んでご冥福をお祈りいたします。

＜第9回定期＞ 今回の久世公演に関しては、3年前と同じく（財）久世エスパス振興財団様に大変お世話になりました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。本年6月倉敷にて日本乳癌学会総会が開催されました。学会長は川崎医科大学乳腺甲状腺外科の園尾教授でした。役員懇親会（チボリ公園アンデルセンホール）にて弦楽合奏を演奏いたしましたが、園尾先生のお計らいで過分な謝礼を頂きました。改めて御礼申し上げます。また毎年年会費をお支払い頂いております当団後援会の方々にも心より感謝申し上げます。

＜第10回定期＞ 昨年の東京公演の成功でつかり味をしましてしました。次回第10回定期でも東京公演を実現させるべく計画をしております。メインは音楽監督の保科先生に指揮していただきますが、先生が何の曲をご希望されるか楽しみでもあり少し不安です。プロコフィエフの古典交響曲と、保科先生の新作も演奏する予定です。どうぞお楽しみに。

＜最後に＞ 創立10周年を過ぎたとはいえたまだ未熟なオーケストラです。しかし、師から学び、私達で考えた私達の音楽を、素晴らしいソリストと共に心をこめて演奏いたします。芸術の秋のひととき、我々の演奏で少しでもおくつろぎ頂ければ幸いでございます。
(あきやまたかし・保科アカデミー主宰)

後援会のご案内

当団後援会は年会費3000円で、小学生以上の方でしたらどなた様でもご加入頂けます。当団演奏活動のご案内と倉敷定期演奏会2名様分のご招待券をお送りいたします。その他、メンバーが関係します演奏会のご案内や招待状を差し上げることもございます。

一昨年は、会員の方を専用練習場『響塾洋楽堂』でのアンサンブル大会に御招待しましたし、今年は地域の小学校での依頼演奏会にご招待いたしました。

後援会連絡先：〒700-0825 岡山市田町 1-8-4 梅田 環

Tel & Fax: 086-231-3778

e-mail: Hoshina_Academy@hotmail.com

CHACONNE

DEALERS OF FINE VIOLINS

百年先まで届く響きを。

シャコンヌは、ヴァイオリンをはじめ、弦楽器のコンサルタントとして安心と信頼をお届けしています。

ご提供する楽器や弓は、ロンドンでのオークションをはじめヨーロッパ各地にて実際に目で見て吟味したものなどを輸入して揃えています。各店には、伝統的な修理技術をもとに日本の繊細な技術を生かした独自の基準をクリアした職人たちが常駐し、楽器本来の姿を取り戻します。また東京海上日動火災保険の代理店として楽器保険業務も行なっております。お客様が安心して演奏活動ができますよう、あらゆるご要望にお応えします。

地方展示会の開催や弊社担当者が全国各地を定期訪問、出張修理なども致しておりますのでご利用下さい。

弦楽器直輸入・修理・調整・楽譜・鑑定・楽器保険
株式会社 シャコンヌ

【全店共通】営業時間／10:00～18:30 定休日／日・月曜日

E-mail : chaconne@pop06.odn.ne.jp



名古屋店
名古屋市中区
栄2-11-19
熊田白川ビル3F
TEL 052-202-1776
FAX 052-202-2990



東京吉祥寺店
武藏野市
吉祥寺本町1-31-11
KSビル904
TEL 0422-23-1879
FAX 0422-23-1876

株式会社 カノン
ヴァイオリンレンタル
名古屋市昭和区隼人町9-1ロイヤル松中2F
TEL 052-834-4911 FAX 052-834-4912



<http://www.chaconne.info>



運命の一本との出会いがここにある



金沢店
金沢市広岡
1丁目2-26
AGS IIビル502号
TEL 076-221-1779
FAX 076-232-3249



九州小倉店
北九州市小倉北区
京町4-5-27
ステーションプラザ
小倉駅前5F
TEL 093-531-2672
FAX 093-531-2574



札幌店
札幌市中央区
北3条西1丁目1-1
パナソニックビル2F
TEL 011-221-2561
FAX 011-221-2562